

研究ノート

## 植物名に探す朝鮮語の影響 — 榎 —

朴 福 美

Influence of Korean language in names of Japanese plants  
— Hackberry —

Pogmi PAK

### 1、始めに

高崎はとりわけて榎が多くある土地柄らしい。古い高崎市史を見ると、「物見ノ木」<sup>(注1)</sup>といわれる巨大な榎樹が城内本丸にあったといい、光明寺の根橋<sup>(注2)</sup>は兩岸の榎が互いに錯綜して天然の橋をなし、たいそうな奇観だったという。一里塚の跡<sup>(注3)</sup>が旧前橋道、九蔵町にあり、それは慶長九年一里塚として道の両側に榎を植えしめたものであることが説明してある。船橋の古跡<sup>(注4)</sup>は今どこにあるかもわからないが、里人の言葉によれば上信鉄橋の上流に榎の大木があって、この榎に当時船をつないでいたものだという。

このように榎は高崎と歴史的に深い縁がある樹木で、高崎大学もまた左右の塚に植えられた榎があったであろう地、上並榎町にあり、現在も榎が何本もそびえている。榎は柳田國男によれば「人間栽植の最も古い歴史を持っている」<sup>(注5)</sup>のだが、その語源となると誰もが納得できるものは無いようである。語源の幾つかを『木の名の由来』<sup>(注6)</sup>から孫引きすると

\* 工は枝で「其枝繁きをいふに似たり」(新井白石著『東雅』1719年)

\* よく燃えるから「燃えの木なり(中略)たき火にあたりてよき木なり」(貝原益軒著『日本釈名』1699年)

\* 槐をエノキと訓じた例があるとしたうえで、「槐はエンジュとよむ、槐の音クワイ、呉音工なるか、工とはエンの音便なるべし」(天野信景『塩尻』、1690年代から1730年頃までの雑話を集めたもの)

\* 「肥え之木の義」(林龜臣著『日本語源学』1932年)

\* 「器具の柄となすに似たり」(松岡静雄著『新編日本古語辞典』1937年)

等の説があるが著者もいっているようにどれもいまひとつ、決め手に欠ける思いがする。

一方群馬県の甘楽郡や邑楽郡という地名が、カラ、ウカラ等朝鮮の古い国名を思わせるように、上野地方は渡来人が多かったといわれている。榎が多く見られ、渡来人がたくさん住んでいた土地は一人ここだけではないだろうが、とりあえず私は榎と渡来人を結びつけ、渡来人がもたらした榎信仰が榎の語源となっていることを論じてみたい。

榎に関する民俗的な面は全面的に柳田國男の神樹篇「争ひの樹と榎樹」に依存し、その文章に従って韓国の榎信仰と比較していきたい。語源を探るための個々の音韻に関してはローマ字表記法を使用し、音節ごとにハイフオンで結ぶ。

## 2、争ひの樹と榎樹 一

この項は導入部分であり、銘木といわれる樹の名が一定しない例をいくつも挙げている。そして、時としてある木が変性して他の木に化することがあるし、榎松というように二種類の木と一緒に生えている場合があることが述べられる。

「上空を畏敬し鳥を神使いとし、自然を神意とした本来の思想」という文がある。

朝鮮朝で国祖の位置を占めるのは檀君だが、檀君が天上から下をみわたして朝鮮の地に降りたって来たことからわかるように、朝鮮では上空は神の住むところで畏敬の対象である。八又ニム(天のお方)という固有名詞もこれを示している。鳥の神使いに関してはこの論文には具体的な例があげられていないが、韓国では村を守ってくれるソツテがあって、これは石の柱の上に鳥の彫刻物が座っていたり、木の柱には木で作った鳥が載っていたりする(例;全羅北道扶安郡扶安邑東中里には石のソツテ、扶安郡扶安面右東里には木のソツテ)<sup>(注7)</sup>。自然を神意とする祭祀が韓国ではソツテや堂山、古木を中心に現在も行なわれている。

## 3、争ひの樹と榎樹 二

「争ひは榎と槻との間にも有った。この二種の樹は共に村里や路傍のものであるが、高さや枝ぶりで遠くからでも見分けられる。それにも拘わらず尚榎を槻と呼ばんとする者があったのである。例へば安芸豊田郡末光村に、世はかりの榎と称して、高さ三間、枝の陰二十間四方を蔽ふほどの、傘の如き大木があった。土地では此木の葉を出ず遅速多少を見て、世はかり即ち年の豊凶を卜する風習があったが、何故か之をツキの木と名づけ、樹下には槻木神社を祀ってあった。」

韓国で榎は神木として、又共同体の集まる場所に植えられることが多いが、榎と混同されることはあまり聞かない。そして木の葉を出ず遅速多少で豊凶を卜する風習は榎に限らず神木の一つの役目である。

#### 4、争ひの樹と榎樹 三

ここでは二に引き続き、棕と榎の混同について詳細にその違いを述べてある。

「棕は榎の一種と見るべき程に相近いもので、精確な区別をする為には学問が入用」であるのに「榎の実ならばなれ木は棕の木」「棕はなっても木は榎」といった俚諺がかたくなに知れきったことを争ふ者を嘲る語として使われた。しかしムクとエノキが大同小異なことは一般に認められていたので、人の片意地の譬えとしては実は甚だ適切で無い。この諺の発生には何か別に最初の理由があったかもしれないとし、ムクとエノキの小異をあげてある。韓国では漢字の棕、榎を日本と同じように使っているが、固有語の区別はない。方言、別名あつかいのものはある。エノキの韓国語は paeng-na-mu（ペンの木）だが、その横に po-gu-na-mu（ポグの木）が括弧にくくられて表示されていたりする<sup>(注8)</sup>。ペンの方は一音節で、ポグは二音節であるが、初声の子音が両方とも p で始まっていることに注意してもらいたい。ペンが榎樹の工になったという検証作業は後に項を改めてするが、一音節系統の‘ペンの木’が‘工の木’になったのであれば、二音節系統の‘ポグの木’は‘ムクの木’になったろうことが考えられる。日本の榎と棕が同じ樹であり、どちらかが方言と解釈すれば、俚諺はどちらも同じ物をことさら区別したがる人間をからかっている意味にとれて、人の片意地の譬えとして適切である。

諺の発生当初には何の不都合も無かったものが、榎と棕が朝鮮語から変化したものであり、もとと同じ物を指す方言であることが忘れられたことで、諺の不都合が生じたわけである。

#### 5、争ひの樹と榎樹 四

この項では「エノキは通例又ヨノキとも呼ばれる。恐らくは嘉樹即ちめでたき木を意味したものだ」と、榎の語源を類推している。この文章は語源探索を主目的にしたものではないのだが、二重母音の‘ヨ’が短母音‘エ’になる母音変化の時代的な説明がほしいところである。ヨの木はムクの木と同じく、朝鮮語の方言‘pyeong-na-mu’‘ピョンの木’から子音 p が落ちたものであることは、項を改めて説明したい。

「人家の邸内に此木を栽した例」があり、「名古屋近傍では其場処は必ず屋敷の戌亥の隅でであり、これを福榎と呼んでいたそうである」とある。本来榎を乾の方向に植えて鎮めの神を祀ったために‘福’という言葉がついたような解釈がされている。朝鮮語ではエノキの別名に pog-na-mu というのがある。この pog は日本語訳すると‘福’となる。na-mu は木だから全体としてはフクノキとかフクギ（福木）の日本語訳が考えられる。フクとフクノキは屋久島、フクギは悪石島にある。ムクエノキがムクとエノキの合体であるようにフクギとエノキが合体してフクエノキとなった可能性が高い。

榎は並榎や二本榎の地名が示すように、二本で植えられることが特徴的であるが、ここでは榎が林をなした例を挙げ「何故に斯くの如く、人里通路には遍く分布して、山野には却って巨木を見ないかは、既に久しい間の不思議」としている。韓国でも街路樹や混成林としての榎が何れ所かあって、天然記念物に指定されている。これらは500年ほどの樹齢をもつが、風水説に従って地形上の欠点を補充するために植えたという口碑があり、現在でも村の重要な防風林の役目をしているという<sup>(注9)</sup>。韓国の榎の生態的な面として、成長が早く、平坦で土が深いところを好むので、山の傾斜のあるところでは育ちにくい。萌芽力があるので種をまいてもいいし、移植でもよく育つとある<sup>(注10)</sup>。日本の山野で榎が育ちにくいかどうかはわからないが、榎信仰が民俗文化として持ち込まれたのであれば、人里に遍く分布していることはむしろ当然かもしれない。

## 6、争ひの樹と榎樹 五

この章では神社の境内には榎が多いが、これを神木と言うには何か特別な理由があったに違なく、境内で最も古いだけでは神木とは言わないだろうとする。

韓国では村ごとに共同体を守ってくれる堂山木(タンサンモク)とか、神木がある。堂山木とは神と人間の間を仲介する樹である。村人たちは堂山木の横に堂宇、神堂などを作って祭祀を行うが、堂山木は榎以外に銀杏、松、エンジュ、など樹齢が永い樹が多い<sup>(注11)</sup>。

又、「そうすると多くの祠の神の榎本と言ふ名も、どうやら其意味が判明するようである」と、榎本という姓が、榎樹の下で神を祭る風習から由来したことをのべている。塚のある無しに関わらず祭事が行われたというが、塚が二基並んでいれば榎本とはまた別の呼び方があったらと思うられる。人はそれぞれの文化と感性でこれを表現するからである。

漢字知識を持っていた渡来人たちがこの二つの塚をどう表現するかを考えてみたい。

- ①二の朝鮮漢字音 i: 表記に使用されたと思われる漢字“飯 イイ”
- ②二の朝鮮固有語 du あるいは dul 表記に使用されたと思われる漢字“藤 トウ”“豊 トヨ”  
 “鶴 ツル”
  - \* “藤” 最初の子音が“d”で dul と同じである。朝鮮では固有語を漢字で表す場合、閉音節の子音は無視されることが多い。
  - \* “豊” は豊葦原などのトヨのト音利用
  - \* “鶴” 韓国語の鶴の固有語は du-ru-mi で、日本語のツルの語源か。
- ③塚の朝鮮漢字音 chong cho-nga chu-ga chu-ka tu-ka ツカ “塚”
  - \* 母音 o u への変化は両方とも唇を突き出す音であり、簡単に交換する
  - \* 子音 g k への変化は g が濁音、k が清音の違いはあるが両方とも調音点は軟口蓋音であるため、音の交換が起こりやすい。
  - \* 閉音節 g、k に母音 a の追加。日本にない閉音節音は、単語末では母音を加え

て開音節の語尾になることが多い。

④塚の朝鮮固有語 その一 eon-deog on-do-ka o-o-ka o-ka オカ “岡”

\* 子音 n と子音 d の消失。語中の閉音節は日本語に無い発音なので消失する。  
両子音は調音点と同じ歯茎音であるために、n 子音に隣り合う d 子音と一緒に消失した。

\* 母音 a の追加。閉音節 g、k は単語末であるため、開音節にした。

⑤塚の朝鮮固有語 その二 dug 使用されたと思われる漢字 “島 トウ”

以上の分析で得られた漢字は “飯、藤、豊、鶴、塚、岡、島” である。これらの漢字を二つの塚の意味に組み合わせると “飯塚、飯岡、飯島 / 藤塚、藤岡、藤島 / 豊塚、豊岡、豊島 / 鶴塚、鶴岡、鶴島” などが得られる。これらのうち、高崎周辺にある名を検討してみよう。

「群馬県百科辞典」を見ると全国に分布するという「榎本」はあがらず、「飯塚」は五人があがっている。「塚越」という姓もよく聞くが、この塚の向こうという意味を朝鮮語で表現すれば

chong-gon-no となる。chong は塚だが、gon-no go go-si ゴシとなる。

\* 閉音節 n 子音と隣り合う第二音節の n が一緒に消失

\* si 語尾の追加。韓国では物の語尾に si 音がつきやすい。チョコレートの綴りは -t で終り、それを十分表現できる発音体系があるにも拘わらず、これをチョコレシ (-si) というし、臓器の腎臓は kong-pat (大豆・小豆の意 コンパツ) で、本来 -t 子音で終わるべきものが、kong-pa-si (コンパシ) と、-si 語尾がついている。

「飯塚」は二つの塚のあたりに住む人に、「塚越」は塚の少し離れたところに住む人に与えられた、榎にゆかりのある地名や姓だといえるだろう。「藤岡」は藤岡古墳がある。「豊岡」は豊岡村があるが、ここには一里塚があって、塚上の榎は百年前に出火で消失した記録がある<sup>(注12)</sup>。「飯島」もよく耳にする姓であるが、並榎町の商店名にもある。

## 7、争ひの樹と榎樹 六

「榎木に関しては又種々様々の怪異談が、現実の記録としてつたえられる。」で始まるこの章は怪異談の紹介で埋まっている。

韓国の神木崇拜と樹木の神秘性について紹介をすると、

①農作の豊凶を卜占する②木の中に蛇が住んだりする③差し木伝説；高僧などが杖を地面に挿しておいたら根が張って立派な木になった④官位を持つ木⑤泣く木；泣いて国の不幸を予告する⑥人格が与えられた木；土地の所有者として土地台帳に記録され、住民登録番号と税負担をもっている⑦酒を飲む木；祭祀を行うごとにどぶろくを注ぐ<sup>(注13)</sup>

①、②、③、⑦については日本もおなじである。日本では榎に歯痛の祈願もするし、榎が木の枕

のようなものを飛ばして、それが突然背戸口から敷居を越えて家の中に転げ込んできた、といったものがあるが韓国にはない。韓国では人間以外の百年ふりたものは怪異な力を持つといわれ、火かき棒などが飛び交う話は伝わるが、神聖な榎に関しては神聖さを損なうような伝説は無いといえるだろう。韓国では現在でも榎に祭祀が行われており、村落共同体を守ってくれる力を持つと信じられているからである。

日本の場合「神木は或神社の境内に限られ、其以外の地に在るものは、之を怪樹と謂はねばならぬことになった」ように、国家宗教に取り込まれたりしているうちに榎は神社の境内にあるものでもその首座からはずれて、たくさんの神の中のひとつにすぎなくなったからであろう。

「王子稲荷の衣装榎の木に、除夜の晩には関八州の狐が集まって狐火を焚く」ことも怪異談のひとつとして紹介されているが、衣装榎とはどういうものだろうか。韓国では堂山木の榎に祭祀を行うとき藁縄で綱をより、これで木をぐるぐる巻く行事があるが、これを新しい服を着せるという<sup>(注14)</sup>。又韓国人は巫の呪力を信じ、巫による祭祀も行われるのだが、村人は家族に病人が出ると巫の家近くの神樹に病人の服を着せて病気の回復を祈願したりもする<sup>(注15)</sup>。

## 8、争ひの樹と榎樹 七

この章では榎が信仰に結びついた天然の不思議をあげる。その一つは植物の寄生で、トビザサ、トビツタなどの珍しい植物がよく榎に育ち、宿主である榎の名を横領する場合があるが、寄生植物などの変化が畏敬を起こさせたのだろうという。又一つ、榎は樹皮が強いため幹が空洞になりやすいことをあげる。「外面はさりげ無く穴の口が狭くして内の広々とあいて居るものは、常に尊いものの宿りであった」と、神が宿りたもうたことをいい、榎木の根元から地下水が樹高い空洞の穴に水をたたえて、葉になったことを伝える。

韓国では榎に限らず、樹の裂け目は女陰の象徴として受け取られている。だから堂山木の横に男根石をおいてあったりする<sup>(注16)</sup>。先の服を着せる榎の祭祀では、稲藁は雄縄と雌縄がよられて、その綱で男組と女組が綱渡りをするが、いつも雌縄が勝つことになっていて、農耕社会での信仰の目的が何であったかを物語っている。この点は榎信仰の核心部分となるだろう。水をたたえる榎木については韓国では知らない。日本より乾燥した気候なので、そのような現象はおこりにくいと思われる。

## 9、争ひの樹と榎樹 八

この章では老婆がついた杖が成長して榎やその他の樹木に成長する口碑が伝えられる。7、で韓国の神木が持つという神秘を七つあげたが、この中に差し木伝説がある。しかしここで紹介された日本での差し木伝説は榎木の神秘性を伝える面よりも、榎が女性性であることを伝えようとするも

のではないかと思われる。韓国の堂山木の榎は二本が少し離れて植えられていて、これをおじいさんの木、おばあさんの木とか呼んだりするが、祭祀はおばあさんの木で行う。全羅北道扶安郡の来蘇寺には寺の中に樹齢950年の榎がありおじいさんの木と呼ばれ、寺の外のすぐ近くにある榎はおばあさんの木と呼ばれるが、正月15日には僧侶がわざわざ寺の外に出てきておばあさん榎にのみ読経をあげる<sup>(注17)</sup>。

又、京都の正月15日の田植え行事に女装した男の舞に、鉦太鼓で「榎木婆おやせ」と囃すことが紹介されている。先の綱渡りであるが、雌綱には未婚の男が女側になって綱渡りをする。老人が鞭をもって男綱を渡る既婚男のすねを打ち、女側を勝たせる。地方の過疎化は韓国も同じで、若者が帰郷するのに頼って祭祀が行われるというから、祭祀が継続されていても簡素化は避けられないだろう。雌綱を渡る未婚の男がその昔は女装していたことは十分考えられる。

このように韓国の堂山木、神樹祭祀は樹、即ち生産する女性性に豊穡を祈願することが顕在しているのである。日本での老婆の杖が榎に成長する口碑はこの名残をつたえるものかもしれない。

## 10、争ひの樹と榎樹 九

この章では榎がト占にどのように使われたかが幾つか述べられている。韓国の堂山木、神樹祭祀も村落共同体ごとに違い、ト占もあたりなかつたりである。

その上で「江戸では昔南町奉行所の七不思議として、婆石・咲かすの藤・ヒヨンの樹などがあつた。此石に腰をかけて菓子を旅人に売って居た老女、此地が御用地と為って活路を失ひ、其藤で首を縊って死んだ。ヒヨンの木は即ち婆の杖であつた、杉の木によく似て居たとあるから多分は杉の木であつたらう。霊になる程の老女の形見なるが故に、乃ち永くヒヨンの木の名を存したのである」と、その口碑の不思議を伝えている。

婆石とは何だろうか。韓国の堂山木信仰の形態から想像すると、8、で述べたように樹の裂け目は女陰であり、榎はおばあさんの木だから、おばあさんの石となると男根石である。榎の花はとても小さいうえに花びらもなく散るから、花をちゃんと見る人はあまりいないし、花びらがないと咲いた痕跡さえ残さない。これは咲かすの榎と言えそうである。藤は蔓性だから、その蔓をひも代わりにしてはできるだろうが、蔓枝で首吊りをするのはむずかしいだろう。大切なのはヒヨンの木である。

ヒヨンは韓国の *pyeong* ピョン（エノキ）が *p h* と音韻変化して *hyeong*（ヒヨン）となったもので、日本のエノキのいろいろな方言の中でよくその本来の音を伝えている音である。音韻変化の詳細は後で述べたい。争ひの樹と榎樹五の章で、韓国の固有語の“二つ”を漢字“藤”で表したことを説明した。藤を二つという意味で解釈すると、「婆石・咲かすの藤・ヒヨンの木」は「男根石があるのに・咲かない・二本の榎木」と解釈できそうである。

「婆石・咲かすの藤・ヒヨンの木」に榎を思はずものは何もないのに著者柳田國男はなぜこの不

思議を書き留めておいてくれたのだらうと思う。そして榎木の信仰を民族固有の宗教であるとし、その源泉を究めたいと思うがまだ自分には解しかねている。しかし千年を一貫してここ木の国語がエノキであったことは、恐らくは大切な痕跡であろう、とものべる。韓国の“ペンの木”が“エの木”に音韻変化したことの検証に移ろう。

## 11、音韻変化篇

音韻変化を探るには方言が不可欠となるが、エノキの方言については倉田悟著『日本主要樹木方言集』を基礎にする。<sup>(注19)</sup>

樹木の名を言うとき日本と韓国には大きな違いがある。韓国は樹木の葉か花か実であるかを必ずその名につけるし、全体を言うときにはその名に木(ナム)をつけて表現している。例えば日本では桜といえば「桜が咲いた。桜が死んだ」といえば通じるが、韓国では「ポッコク(ポツ=桜、コツ=花)が咲いた」とか「ポツナム(ポツ=桜、ナム=木)が死んだ」といわないと通じないし、ポツだけで使うことはほとんどない。日本の榎の別名にこの影響があってエノキ(エの木)、とかエノミ(エの実)が混在している。エハナやエノハナ(エの花)も考えられるが全く見あたらない。これは榎の花がほとんど人の注意を引かないからである。一方赤い実は人間も鳥も食べるし、地面にたくさん落ちるから榎を特徴づける一つとなって、その名もエノミ、アカミ、アカヨノミ、クロヨノミなど多数ある。

エノキはニレ科であるが、『日本主要樹木方言集』の種のうち、むくのき・えぞえのき・えのき・うらじろえのきの四種の名称を対象にする。えぞえのきには備考として「えのきと同一方言名で呼ばれるのが普通である」と加えてあるので、種の名前は別にして、むくのき・えのきの二つに大別できる。ムクの木・エの木の“の木”という共通部分を取ると“ム・ク”という二音節と“エ”という一音節の音が得られる。ムクの二音節系統は28個、エの一音節系統は57個があげられている。又、ムクをエノキ、ムクエノキ、モクエ、ヨノミ、などという地方ががあって、エノキの一音節系統の名称と混在している。エノキの方にはムクの混在は無いが、エモク・エムク・コモク(香川)といったエノキ+ムク的な名称がある。

韓国にもこの一音節系統の paeng(ペン)と二音節系統の po-gu(ポ-グ)があり、これは同じ木をさす。一音節系統には pog(ポツ)というのもあり、この音は閉音節に母音 u をつけて語尾にすれば pog po-gu(ポ-グ)と、すぐに二音節になる。ポツは一音節系統と二音節系統の中間的位置にあることになる。一音節も二音節も元々は同じ音であったらうことが伺われる。具体的な音韻変化に入ろう。

### ① 一音節系統

\* 韓国共通語 paeng(ペン) haeng(ヘン) aeng(エン) ae(エ)

“ヘン”は争ひの樹と榎樹丸にヒョンの木があることから類推したが、この名を使っている所



はない。ペもへも息の音である。

“エン”はヘンから h 子音が脱落。h 子音は息の音で聞き漏らしやすい。しかし閉音節の n は生きている。エンの木は青森・静岡・佐賀地方にある。

“エ”はエンからさらに閉音節の n が脱落。日本語にない閉音節は無視されやすい。榎、榎木などと表記される共通語で、各地に分布する。

\* 韓国語別名 pyeong (ピョン) hyeog (ヒョン) yeog (ヨン) yeo (ヨ) yu (ユ)

“ヒョン”は争ひの樹と榎樹九 にその音がみえる。

“ヨン”はヒョンから h 子音が脱落。ヨンの木の名は無いが、シロエノミが大分に、シロケヤキが青森にある。日本固有語のヨツ 漢字音シ(四)でヨンの音を伝えているのでないだろうか。榎の実は緑 赤 黒と熟すだけで、白い榎の実はありえない。

“ヨ”はペン エン エと変化したのと同じく、ヨンの閉音節音 g が脱落したもの。ヨの木は富山・佐渡・山形・石川・新潟・岐阜・福井・滋賀・三重・山口・和歌山・兵庫・鳥取・香川・愛媛・奈良・島根と、広範囲にある。

“ユ”は yeo を少し小さく発音すると yu になる。ユの木は富山・長野に分布する。

\* 韓国語別名 pog (ポツ) pog とよく似た音 bog は福を意味する。“福”は韓国人が好む言葉の五指に入るような大切な語彙である。もう一つ考えられるのは、

pog (ポツ) hog hug hu-gu hu-ku (フク)の音韻変化である。

p h は息の音、o u は母音で開口度の大小であり、g k は軟口蓋音という共通点がある。つまり日本語訳しなくても pog はフクに変化する。日本語のフク(福)そのものが朝鮮音からきた可能性が高いのである。

“フク”はフク、フクノキが屋久島、フンギ、フクイキ、ヤマフクギが沖縄、フクギが悪石島、フンギが奄美大島と南西諸島に広がっている。

## ② 二音節系統

韓国語は pu-jyo (プ-ジョオ)、po-gu (ポ-グ)、dal-ju (タル-ジュ)、ge-paeng (ケ-ベン)、mae-tae (メ-テ)の五種類があげられる。

\* po-gu (ポ-グ) mo-gu (モ-グ) mo-ku (モ-ク) mu-ku (ム-ク) mu-ko (ム-コ)

p m は唇音、g k は軟口蓋音という共通点で音韻変化がおこりやすい。“モク”は香川・福井・岡山・静岡・広島・島根にあり、“ムク”は静岡・香川・福井・岡山・広島・島根にあり、“ムコ”は茨城・静岡にある。

\* ge-paeng (ケ-ベン) ge-baeg (ケ-ベン) ge-bi (ケ-ビ)

ae i, g の脱落は“の木”がつくための変化。ケビノキは兵庫(但馬)にある。

なお ge-baeg は犬榎の意味である。

## 12、漢字表記篇

韓国ではエノキの漢字語表記を 榎樹 ga-su (ガス)、椋樹 ryang-su (リヤンス)、榭木 paeng-mog (ペンモツ)、朴樹 bag-su (パッス) などとする。

- ① 榎樹・椋樹；日本と同じ字を使っているが、日本では訓読されるのに反し、韓国では漢字を音読する。
- ② 榭木；榭は韓国国字である。彭を韓国ではペンと読むため、榎の固有語ペンを表現するため偏で意味を、作りで音を表した。
- ③ 朴樹；朝鮮では三国時代から漢字の音と意味を借りて固有語を表記してきた。これを吏読・郷札などという。“朴”は先に一音節系統であげた pog という固有語を、漢字を借りて表記したものである。

日本の文献で最初にエノキが出てくる孝徳記には、物部朴井連稚子(えのいのむらじしいのみ)、朴市秦造田来津(えちのはたのみやつこたくつ)という某臣名があり、この中の朴が榎である。

万葉集では「わが門の榎の実もり喫む百千鳥千鳥は来れど君ぞ来まさぬ」と、榎が使われ  
古代歌謡の催馬楽では「葛城の寺の前なるや 豊浦の寺の西なるや 江[榎]の葉井に」と、江が使われているという。<sup>(注20)</sup>

日本では“榎”は国字であるという説もあり、漢字表記は複雑である。柳田國男は「漢語が日本の社会に利用せられ始めた時代には、我々のエノキに充つる木偏に鬼、即ち槐の字を以てせんとする者があつた。それに先だつては木偏にト、即ち朴の字を以てエノキと訓ませようとした試みもあつた、それが後終に榎の字又椋の字に一定したのはどういう経路であつたらうか。」と、漢字表記の変遷を物語っている。

朝鮮でも植物の漢字表記は苦労しただろう。特にエノキは信仰と結びついた神聖な樹木であるために、何とか固有語で表現しようとしたはずである。一番古い表記“朴”をエと読ませたのは明らかに朝鮮の吏読表記であり、十分に根拠のある表記だったのである。“朴”を“エ”に読ませたのは渡来系の人だったろうし、“江”はペンの子音 p が落ちた音がすっかり定着した頃に使われて、その音を写したものである。

## 13、終わりに

アメリカの将軍マッカーサーは韓国ではメガトーと発音される。これを初めて知ったとき、私は狐に化かされたような気がしたものだ。日本語は表音文字だが母音と子音の関係を気づきにくい面があり、音韻変化が理解しにくいといえるだろう。具体的な名詞、それも多く挙げることで克服を試みた。

植物名に探す朝鮮語の影響（朴）

地名、人名については今回あげたものの他にもまだまだ考えられる。しかし日本が膨大な姓を持つ国であり、その多くは漢字二字であることから、二つの塚を意味する漢字で作る姓はほとんどが現存するものとなる。乱用は禁物であるが、その姓の発祥地との関係を考慮すれば信頼性は高まる。

「争ひの樹と榎樹」にも何度も言及されているように神社と榎は深い関係があり、此の柳田論文に限ってみても「氷川神社」「忍岡神社」「金杉天神社」「三島神社」などは二つの塚、又は左の塚を暗示する音である。榎をいうのに左榎（神木サエノキ）、京の左女牛神社などはあるのに右の榎をいうことが無いことと、朝鮮でおばあさんの榎のみに祭祀が行われたことと何か関係がありそうである。又、右側や男を暗示する神社名を探し出せば、左と女の関係もはっきりする。神社名は神社のよってきた道に迫る可能性を秘めているかもしれない。

（ぼく ぼんみ・本学経済学部非常勤講師）

注

- 1 『高崎市史』 昭和2年版復刻版国書刊行会下巻 p. 506 を参照のこと。
- 2 同上 p. 507 を参照のこと。
- 3 同上
- 4 同上 p. 512 を参照のこと。
- 5 『柳田国男全集19』 神樹篇 「争ひの樹と榎樹」 筑摩書房 1999年 p. 544 を参照のこと。
- 6 『木の名の由来』 深津正・小林義雄 東書選書131 1997年 p. 33 を参照のこと。
- 7 『踏査旅行の手引1 全北』 韓国文化遺産踏査会篇 ソウル・トルペグ 1999年 p. 97、p. 117 を参照のこと。
- 8 『HANDBOOK OF KOREAN LANDSCAPE WOODY PLANTS』 金ヨンシク・他 ソウル・光日文化社 2000年 p. 121 を参照のこと。
- 9 『ウリ ナム ベックカジ（私たちの樹 百種類）』 李ユミ ソウル・玄岩社 1995年 p. 333 を参照のこと。
- 10 同上
- 11 『ソサラ ナムヤ（伸びる 木や）』 イム ギョンピン ソウル・タルンセサン 2001年 p. 193 を参照のこと。
- 12 前掲書 注1 p. 527 を参照のこと。
- 13 前掲書 注9 p. 202~203 を参照のこと。
- 14 前掲書 注10 p. 333 を参照のこと。
- 15 『韓国の木の文化』 宋弘善 ソウル・文芸散策 1996年 p. 133 を参照のこと。
- 16 前掲書 注7 p. 172 を参照のこと。
- 17 前掲書 注7 p. 111 を参照のこと。
- 18 『日本主要樹木方言集』 倉田悟 地球出版 1963年
- 19 山田宗陸 『花古事記』 山田宗陸 八坂書房 1989年 p. 183 を参照
- 20 参考文献 『カムイから神へ』 柴田治呂 筑摩書房 1996年